

---

## 『東西南北2011』 発刊にあたって

『東西南北2011』をお届けします。

本号の編集に携わって、あらためて思いをあらたにするところがありましたので、そのあらましを書きとめることで、編集後記に代えたいと思います。

前号のこの欄に、本誌の「総合雑誌」的な特色を言挙げし、「ここにはさまざまな知のいとなみが凝縮されたかたちで展開し、相互に関連して」いるとし、「個別のシンポジウムやプロジェクト報告をお読みいただくだけでなく、ぜひとも隣の垣根も、そのまた隣の芝生も覗いていただければ」との懇憚の言を連ねたのでした。

本号もまた、それぞれの研究プロジェクトの活動を基盤とした2本のシンポジウムと、3つの研究プロジェクトの成果を掲げることができました。

公開シンポジウム『子どもを育む「環境」の力』は、ムーブメント教育・療法による「子育て支援」に携わってきたプロジェクトの、外部講師を交えた講演とワークショップの催しでした。『環境教育と市民教育の新たな地平』は、教育GP活動を踏まえつつ、「流域環境」への貢献と教育を足がかりに、シチズンシップを養う方途を模索しようとした国際シンポジウムです。この二つに、発達障害などへの取り組みを意味づけようところみた『コミュニティ支援への理論的・実践的なアプローチ』を付け加えれば、取り組みの対象も方法もそれぞれに異なっていますが、共通する問題意識は「環境」のようです。

他の2グループ『近代日本の保育実践史研究』『東京一市民の生活と文化』も歴史認識を介在させながら、幼稚園という保育の「現場」、市民の生きてきた都市という「現場」を取り扱っていて、これまた、それぞれの角度から「環境」へのアプローチを試みているといえ、あまりにも牽強付会だと笑われるでしょうか。

そもそも和光大学総合文化研究所は、社会研究系、文化研究系、アジア研究系の三系を柱として研究プロジェクトを結成し、研究領域も問題意識もディシプリンも異なるメンバーが同一の研究課題の下に結集し、対象に取り組むとともに、プロジェクト構成員相互の認識を戦わせたり、すりあわせたりすることによって、研究課題を深めることをめざしてきました。それが期せずして、各プロジェクトや研究系の枠組みをはるかに越えて、結果的にはあるにしても、

---

こうして共通の課題に取り組んでいるのですから、思わず自画自賛したくなるというもの。先号にもまして、「ご用とお急ぎでない方は／ご用とお急ぎの方も、個別のシンポジウムやプロジェクト報告をお読みいただくだけでなく、ぜひとも隣の垣根も、そのまた隣の芝生も覗いて」いただければと願っています。

なお、前号から始めたブック・レビュー欄でも、4冊の新刊書を紹介することができました。総員100名足らずの小さな研究所ですから、研究活動の隆盛をとどもに慶びたいものです。

そうではありますが、一方では、あらためて三省しなければならない点もあります。

研究領域も方法も異なる多くの所員の論文を掲載するのですから、『東西南北』はおのずと総合雑誌の体裁になります。ただ、それが単に各論の寄せ集めに終わることなく、真の意味で「総合雑誌」になるためには相応の努力が必要とされるということです。しかし、そうした気構えが所員各自に備わっているかという、いささか忸怩たるものがないわけではありません。

個別の論文はおのおのの専門に傾斜し、その分野の優れた達成でなければならぬことはいうまでもありません。ですけれども、それとともに／それ以上に、各研究プロジェクト内部で相互批判・研鑽によってあらかじめ鍛えられているはずですから、その言説も限られた専門領域の読者に向けられる以上に、だれもが読みやすく、分かりやすいメッセージとして調えなおされていなければならぬということです。

ひるがえって『東西南北2011』を読み返せば、テクニカルタームといえども聞こえはよいのですが、仲間内だけに了解されている「学界方言」とでも呼ぶべきことばが頻出しているばかりか、無条件に流通している観がないとはいえません。そうした傾向に歯止めをかけるべく、かなり大胆に編集権限の大鉈を揮わせてもらいもし、執筆者に書きあらためてもらいましたが、さて、どの程度、功を奏したか。はなはだ心許ないものがあります。

問題にしているのは、単に情報の送り出し方のことではありません。一般読者をもまきこむ、分かりやすいけれども、強靱なことばに組み換えることによってはじめて、あらためて拓けてくる研究領野や、湧きあがってくる研究を育む「環境の力」に対する、謙虚で、鋭敏なアンテナを立てることができると思われるからです。

和光大学総合文化研究所所長 塩崎文雄